

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530150

研究課題名(和文) 国際連盟の社会人道面での活動とイギリス人の東アジア情勢観察

研究課題名(英文) The League of Nations and the British in East Asia: internationalism in the social and humanitarian fields

研究代表者

後藤 春美 (Goto-Shibata, Harumi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：00282492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：国際連盟は、平和の維持を第一の目的として設立された機関であったが、社会・人道面でも大きな役割を果たした。また、その活動は当初はヨーロッパ中心であったが、1920年代半ば以降は東アジアでも、保健衛生、アヘンの取り締まり、中国との技術協力などの活動を行った。このような国際連盟の東アジアにおける社会人道面での活動にイギリス人はどのように関与し、また、国際主義の高まりとの日本の格闘をどのように観察していたか、について研究を行った。

研究成果の概要(英文)：The League of Nations was established in order to maintain peace, but it also played a significant role in social and humanitarian fields. Although it was initially concerned only with European problems, it came to be active in East Asia since mid-1920s. Its achievements in improving health conditions, in controlling opium, and in its technical collaboration with China are remarkable. Making use of the League's and the British archival materials, this study analyzed the British involvement in the League's activities in East Asia and how the British observed Japan's struggle with the growing internationalism in the region.

研究分野：国際関係史

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：国際連盟 イギリス internationalism アヘン 対中国技術協力 保健衛生 ビルマ

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦後に平和の維持を目的として設立された国際連盟は、第二次世界大戦の勃発を防ぐことができず、失敗した機関と考えられてきた。日本では海野芳郎『国際連盟と日本』(原書房、1972年)というすぐれた研究があったが、この研究が非常に包括的なものであったことが上記の要因に加わり、連盟に関する研究はほとんど行われていなかった。

国外においても国際連盟の研究は長く全く不活発であったのだが、21世紀に入るところから様相は変化した。これは、一つにはジュネーヴの国際連盟史料館が優秀なアーカイヴィストを得て連盟期の史料を歴史家に使いやすく整理したことによる。このことをきっかけとして国際連盟に関する研究は大きな盛り上がりを見せるようになった。例えば、S. Pedersen, 'The Maternalist Moment in British Colonial Policy', *Past and Present*, 171 (May, 2001) などの研究が現れた。

本研究の代表者である後藤春美は、元来戦間期の東アジア国際関係史を研究していたのだが、イギリス外務省の史料を使うことで、国際連盟の社会人道面での活動に関連した研究も行うこととなった。本研究開始までの成果としては、後藤春美『アヘンとイギリス帝国——国際規制の高まり 1906～1943年』(山川出版社、2005年)、後藤春美「国際連盟の対中技術協力とイギリス 1928-1935年——ライヒマン衛生部長の活動と資金問題を中心に」服部龍二ほか編『戦間期の東アジア国際政治』(中央大学出版部、2007年)などがある。

これらの研究によって、それまで失敗した機関と考えられることの多かった国際連盟が実は社会人道分野ではかなりの成果を上げていたこと、また、ヨーロッパ中心の機関と考えられていたにもかかわらず、1920年代半ば以降、東アジアにおいても積極的に活動していたことが分かった。ただし、上記の後藤春美の研究は主としてイギリス公文書館所蔵資料に基づいていたため、ジュネーヴの国際連盟史料館所蔵資料とも突き合せて検討を行うことを考えた。

2. 研究の目的

1 「研究開始当初の背景」でもふれたように、国際連盟設立の第一の目的は平和の維持であった。しかし、一方で、連盟はアヘン取締り問題、婦人児童売買の取締り問題、保健衛生問題などで社会人道分野においても大きな責任を負い、かなりの成果を上げていた。それだけではなく、1920年代半ば以降、社

会人道面においては東アジアでも活発に活動し、ヨーロッパから多くの専門家たちが東アジアを訪れた。これらのヨーロッパ人、特にイギリス人は、19世紀半ば以来東アジアで活動していた外交官、経済関係者など往々にして帝国権益の維持拡大を目的とする人々とは異なった種類の人物たちであった。

本研究では、このような連盟関連の活動で東アジアにやって来たヨーロッパ人、特にイギリス人の専門家たちが、東アジアで何を見たのか、派遣された者相互の関係はどうであったのか、彼らの考え方は東アジアの国際情勢に影響を及ぼしたのか否か、などの問題について資料を収集し、分析・検討することを目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法は、第一に、文書館に所蔵された資料を収集・分析検討することである。以前から利用してきたイギリスの大英図書館、イギリス公文書館、ロンドン大学政経学院図書館などに加え、ジュネーヴの国際連盟史料館、イギリスのケンブリッジ大学チャーチル・アーカイヴズ・センター、ブリストル大学史料館などに所蔵されている個人文書も利用した。

第二に、日本政治外交史、中国政治外交史、東アジア国際関係史などの最新の成果と突き合せて分析を深めるよう努めた。

4. 研究成果

成果としては、第一に、前掲「国際連盟の対中技術協力とイギリス 1928-1935年」に引き続き、国際連盟の対中国技術協力、それにかかわった人々、その考えなどについての検討を深めることができたことがあげられる。下記5〔図書〕②では、満洲事変期、同〔雑誌論文〕①では、1939年の対中技術協力について論文を活字にすることができた。

実は、さらに1本「日中戦争勃発後の国際連盟対中国技術協力」という論文も準備している。これも雑誌に投稿しようかとも考えたのであるが、すでに国際連盟の対中国技術協力というテーマについて何本かの論文を執筆することができたので、これらをまとめ、『国際連盟と東アジアの帝国秩序』(仮題)といった書物にできないかと考え始めている。この構想に関しては、補助期間内ではないが、2014年7月19日に帝国史研究会(於武蔵大学・東京都練馬区)において報告する予定である。

第二の成果としては、必ずしも研究開始当

初の目的ではなかったのだが、『アヘンとイギリス帝国』に続く時期のアヘン問題に関して成果を上げることができた。下記5〔雑誌論文〕①では、国際連盟の対中国技術協力が1939年には、中国雲南省とイギリス帝国領であったビルマの境界領域での伝染病対策に注力したことを扱ったのだが、この地域は古くからマラリアが猖獗を極めた地であった。イギリスは、このマラリアが中華帝国の西進を妨げてきたのではないかと分析していた。アヘンは、現在では麻薬としか認識されていないのであるが、当時この境界地域においてはマラリアや下痢などに対する薬と考えられていた。したがって西洋式の医療が導入されていなかった、このビルマと雲南省の境界領域では、アヘン使用もさかんであった。

第二次世界大戦は、この地域にも大きな変化をもたらすこととなった。〔雑誌論文〕①で検討したように、国際連盟はこの地の伝染病に戦いを挑み、この地を大規模な交通が可能な地へと変容させていった。また、大戦中の日本による占領はこの地にも及んだ。

第二次世界大戦中から、戦後に再び国際機関を設立する構想が練られていた。アヘンそのほかの麻薬取締に関しては、国際連合経済社会理事会のもとに委員会が設立されることとなった。ビルマに復帰したイギリスは、1945-46年にかけて、中国との国境に接した辺境地域のアヘン問題をどのように解決していくかという問題に直面した。山岳森林地帯で実際には密貿易の管理など不可能であるのに取締りを明言するのかと苦慮したのだが、すでにアヘンを放置する旨を国際社会に対し言明することなど全く不可能な時代が到来していた。最終的にビルマは独立し、イギリスはアヘン問題を解決しないまま去ることとなったのであった。この問題に関しては、下記5〔雑誌論文〕②、同〔図書〕③で扱った。

第三の成果としては、以前の科学研究費補助金による成果を、本補助金による資料で補強して共編著に収録した論文にまとめることができたことである。これは、下記5〔図書〕④、⑥、⑦などである。④、⑦は、第二の成果と同様に、アヘン問題なのでここで詳しく触れることはしないが、⑥に関してはもう少し説明する。

⑥所収の後藤春美執筆論文は、「中国のロシア人女性難民問題と国際連盟——帝国の興亡の陰で」である。この問題は、ロシア革命や、ソヴィエトでの集団農場化を逃れた難民を取り扱う。これらの難民のうちヨーロッパに逃れた者については1920年代からよく知られており、また、第一次世界大戦による膨大な死者によって労働力の激減していた

フランスなどでは、難民たちも職を得、社会に同化していくことができた。

しかし、中国に逃れた難民の存在が国際連盟の注目を集めたのは1930年代になってからであった。そのきっかけは、婦人児童売買問題に関する調査団がアジアを歴訪したことによる。婦人児童売買問題は、国際連盟規約23条(ハ)項によってアヘン問題と並び国際連盟の任務とされていた。婦人児童売買問題の調査団によって問題が明らかとなったため、ロシア人難民の中でも特に女性の苦境が大きな注目を集めた。現地の労働力が非常に豊富な東アジアにおいて、ロシア人難民は、ロシア語しかできなかつた場合、職を見つけるのが非常に困難であった。

このロシア人難民問題に関連して活動した連盟関係者、連盟の専門家、対中国技術協力問題やアヘン問題の場合と重なっていた。同じ社会人道分野の問題であったためと考えられる。例えば、デイム・レイチェル・クラウディというイギリス人女性は、女性として初めて国際連盟の社会問題部門の長となった人物であり、そのことから保健衛生問題、アヘン問題そしてロシア人女性難民問題すべてに関与していた。また、サー・ジョン・ホープ・シンプソンというイギリス人は、インド高等文官の出身で、1931年中国揚子江の洪水に対処するため連盟によって中国に派遣された。この洪水によって難民も被害をこうむっていた。イギリスに帰国後のシンプソンは、王立国際問題研究所(チャタム・ハウス)で『難民問題』という書物を著すこととなった。

このようにして東アジアに関わるようになった専門家たちは、元来、外交官や経済関係者とは異なる視点を持っていた。帝国権益の保持と異なる関心を持っていたことは、新しい時代を切り開く上で利点となった。一方で彼らに全く問題がなかったわけではなかった。彼らは往々にして東アジアの現実には全く知識がなかった。また、必ずしも人種偏見から自由でない場合や、中国に対する深い理解や愛とは縁遠い場合などもあったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ① 後藤春美、「1939年の国際連盟対中国技術協力とビルマロード」、『国際社会科学』(紀要)、査読なし、63号、2014年、頁数未定。

- ② 後藤 春美、「国際連合麻薬委員会設立をめぐるイギリス外交——ビルマのアヘン問題という桎梏」、『国際政治』、査読あり、173号、2013年、127-140頁。

[学会発表] (計 1 件)

- ① 後藤 春美、「国際関係の中のイギリス帝国と東アジアの境界領域」、史学会、2013年11月9日、東京大学(文京区本郷)。

[図書] (計 7 件)

- ① 後藤 春美、「イギリス帝国の危機と国際連盟の成立」、山川出版社、池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』、2014年、283頁(うち25-51頁を執筆)。
- ② 後藤 春美、「国際連盟と日本——満洲事変期の対中国技術協力をめぐって」、中央公論新社、細谷雄一編『グローバル・ガバナンスと日本』所収、2013年、302頁(うち15-56頁を執筆)。
- ③ 後藤 春美、「日本による占領から『解放』後ビルマのアヘン規制構想」、勉誠出版、渡辺昭一編『アジア遊学 ヨーロピアン・グローバリゼーションの歴史的位相』所収、2013年、236頁(うち202-213頁を執筆)。
- ④ 後藤 春美、「アヘンと国際秩序」、岩波書店、川島真など編『岩波講座 東アジア近現代通史 第4巻』所収、2011年、395頁(うち206-226頁を執筆)。
- ⑤ 後藤 春美、「日英 150 年の政治外交関係」、ミネルヴァ書房、木畑洋一など編『近代イギリスの歴史』所収、2011年、372頁(219-237頁を執筆)。
- ⑥ 後藤 春美、『帝国の長い影』、ミネルヴァ書房、2010年、295頁(木畑洋一と共編著)。
- ⑦ GOTO-SHIBATA, Harumi, 'The League of Nations, Washington and Internationalism in East Asia', London: Routledge, Antony Best (ed.) The International History of East Asia, 1900-1968, 2010, pp. 57-68.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 春美 (GOTO-SHIBATA, Harumi)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：00282492